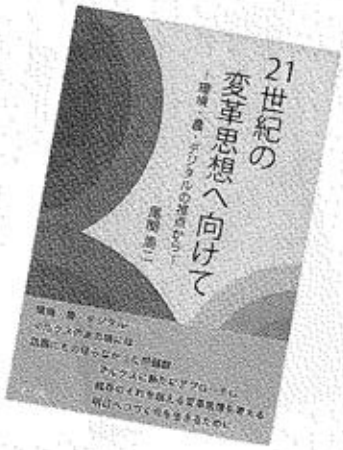
スケール雄大な変革思想の現代的試み

「物質代謝様式」「労農アソシエーション」「個人的・社会的所有」「農工デジタル社会」という四つの新造語を提案する

島崎 隆

尾関周二 著
▶21世紀の変革思想へ向けて
環境・農・デジタルの視点から
4・20刊 四六判376頁 本体2728円
本の泉社

図書新聞 2021.10.16



私は尾関氏の著作をほとんど拝読してきたが、その問題関心の広さと内容の豊富さ、着眼点のよさには、おおいに学んでいる。なるほど、多くの問題領域を自分なりに面白く展開する論者は多いが、そこで発生してきた多様な議論を客観的にフォローしながら、それを取り込んだのちに自説を組み立てる人は少ない。氏の独自性はそこにある。本書の狙いは、①地球環境問題、②農業・食の問題、③AI、ITなどデジタル革命の問題という三つの視点を統合して、二一世紀のあらたな変革思想を構築することであり、氏の長い研究歴で総括的な位置をしめる著作であろう。さらに私は本書を読んでいるあいだ、たえず斎藤幸平『人新世の「資本論」』というベストセラーと比較していた。両者ともに、環境問題を重視し、さらにマルクスに注目するからであるが、内容的な差異も当然あり、そこがあらたに知的刺激を呼び起こさざるをえない。さて氏は、本書で「物質代謝様式」「労農アソシエーション」「個人的・社会的所有」「農工デジタル社会」という四つの新造語を提案する。さらにマルクスの思想のいくつかの新解釈も興味深い。とはいえ氏は、さらに世界的に、核戦争の脅威、貧富の差の拡大、科学・技術の否定的影響、人口増大などの問題群を考慮している。以下、さきの四つのキーワードにそって論評していきたい。

「物質代謝様式」というのは、人間と自然の間の物質代謝をマルクスの労働論として解釈して、環境問題の解決に役立てようとする見方であり、従来の史的唯物論の根底にさらにこの立場を置くべきだということである。エコロジー的マルクス主義を唱える多くの論者がこの「物質代謝史観」を採用するが、氏はさらに若きマルクスの提唱した「人間主義と自然主義の統一」という立場を、この物質代謝様式とあらたに結合して考える。この複合的な見方のほうが幅広く説得的であろう。ところでマルクスの史的唯物論は、近年、その説得性の問題もあってか、言及が避けられてきたといえよう。とはいえ、氏はいわゆる史的唯物論には否定的な態度をかならずしもとっていないが、マルクス『経済学批判』「序言」の史的唯物論の公式を現時点でどう評価するか、あらためて検討していただければと思う。興味深いのは、地層との類比でいわれたマルクスの「社会構成体」に関して、単に奴隷制・封建制・資本制と横へ発展するのみではなく、先行の共同体を古層として、それを縦の関係として、そのうえで新しい構成体が積み上がるという主張である。そうすると、マルクス史的唯物論では横と縦の二重の複雑な運動が内包されることとなり、この点を深めていただきたいと思う。実は「個人的・社会的所有」の構想も、この共同体重視の考えとつながる。というのも、氏によれば、ロックが個人の労働が純粋に土地や生産物の所有につながると考えたのにたいして、マルクスは前近代からの共同体所有が大前提にあり、それを基盤に部分的に私有が発生してきたとされるからだ。だからこそ晩年のマルクスは、ロシアで残存する農村共同体を継承して、共産主義社会が成立可能だと考えたのである。社会主義成立時の「個人的所有の再建」(『資本論』)という構想も、個人的かつ社会的な所有の成立を表現している。この点で、エンゲルスがマルクスを誤読してしまったという氏の指摘に賛成したい。

さて、「労農アソシエーション」という考えは、氏が農学部所属だったという事実にも関係すると思われるが、〈農〉を重視するという発想がここに関わる。そこで氏は、〈共生〉をキーワードに、環境保全農業、地産地消、半農半X、市民菜園、週末農業などの現象に注目し、貨幣による商品の購買の逓減、奢侈的な欲望のコントロールを提唱してきた。これはさきの、マルクスのエコロジー的な共同体重視の考えにもつながる。この点で氏は、環境的正義、自然の権利、自然の内在的価値などの、従来のエコロジー思想にも検討を加える。いわゆるレーニン型の労農同盟だと、遅れた農民を労働者が指導するという発想になってしまいがちだが、〈農〉を重視する氏の立場では、まさに発想が逆転する。最近エコマルクス主義で強調される〈アソシエーション〉は、国家主導の社会主義建設ではなくて、農民・労働者が水平的に連合して政治や生産をおこなうという発想である。ここでも、労働者も農民も個人的かつ共同的な労働をおこなうとされる。「農工デジタル社会」というキーワードのもとでは、まず氏は現代進行中の「デジタル革命」「第四次産業革命」のもとで、八〇年代のME化、IT化から、さらにIoT化、人工知能、ロボット、ビッグデータ、ディープラーニングなどの発展に注目して紹介する。こうして氏は、最新の科学・技術の問題にも果敢に挑戦する。さらにスマート農業、AI農業などにも触れられるが、これらの視点も脱資本主義化のもとで考えられるべきとされる。「デジタル生産様式」の指摘にも言及されるが、この生産様式が史的唯物論といかに関わるのかを含めて、上記の最新のテーマは、また批判的に深められる余地があるようである。

本書は丁寧にわかりやすく叙述されており、変革のための現代的な思想はいかにあるべきかという問題が、多くの現実と諸説(ハラリ、ウォーラスティン、ポランニー、アンダーソン、渡辺憲正、平子友長、野口宏、池内了ら)に即してよく理解できる。これからの世界の展望について幅広く考えたいという人たちにお薦めしたい好著である。

(一橋大学名誉教授)